

第二章 漢字はゼロ歳から覚えられる！

●……「東京」「とうきょう」「TOKYO」一番わかりやすいのは？

二十数年前、日本道路公団が実験した事実——これこそは漢字教育の重要性をズバリ示唆しています。

日本道路公団は、道路標識をつくるときに「東京」「とうきょう」「TOKYO」など三種類の標識をつくりました。

ドライバーにとって、地名を表す標識を早く正確に認識するにはどの表記がよいかを実験しました。道路標識を読み取るのに、時間がかかるのは致命的な欠陥です。事故を誘発しかねません。一瞬で読み取れる文字でなければいけないのです。

漢字とかなとローマ字でどれくらい違いがあると思いますか？

ローマ字で「TOKYO」と書かれた標識は、一・五秒の時間をかけないと読み取れませんでした。

1

かなで書かれたものは〇・七秒、ローマ字の二分の一です。それに対して、漢字で書かれたものは

〇・〇六秒で読み取れることが明らかになったのです。何とかなの一〇倍の速さです。

この実験結果を踏まえて、高速道路では漢字で書けるものはすべて漢字で書く、ということになったのです。なぜ漢字のほうが早く正確に読めるのかというと、かなの場合、一目では読み取れず、一文字ずつ読まなければなりません。漢字は、見た瞬間に判読できるのです。この差です。

もう一つの例を見てください。

「かわからのおおきなももがながれてきました」

これを瞬間的に読み取るのはむずかしいでしょう。

「かわから、おおきなももが、ながれてきました」

句読点を打つても、まだ読みにくさがあります。一字一字読まないと意味がわかりません。

ところが、漢字交じりの文章にすると、見た瞬間にわかります。

「川から大きな桃が流れて来ました」

2

●……「鳩」「鳥」「九」「く」の中で一番むずかしいのは「く」

幼児にとって、なぜ漢字はかなよりもやさしいのか、もう少し、話を続けましょう。

鳩という文字を分解すると、「九」と「鳥」となりますが、「鳩」「鳥」「九」の中で、どれがやさしいかと聞けば、誰もが「九」が一番やさしいと答えるでしょう。

たしかに、字が一番単純なのは「九」で、複雑なのが「鳩」ですから、そう答えるのです。

ところが、幼児にとって、もっともやさしいのは鳩です。逆に一番むずかしいのは九なのです。つまり私たちが思っていたこととちょうど反対です。

これまで、私たちは鳩と九という字では、九のほうがやさしい、さらに、ひらがなの「く」はもっとやさしいと考えていました。事実、小学校に入って、最初に教えられるのはかなです。

ところが、どんな子どもでも、覚えるのに一番時間がかかるのはかなです。漢字の九よりもまだむずかしいくらいなのです。

どういうことかというと、実物の鳩は外で簡単に見ることができません。空を飛んだり、餌を食べている鳩を指し示して、あれが「鳩」だと教えれば、幼児は一回で「鳩」という漢字を覚えてしまうのです。

ところが、「はと」と教えたのでは、記憶するのっかかりがありません。人の顔でも特徴のある顔ほど記憶に残りやすいのと同じことです。

簡単なものというのは、逆に記憶の手がかりがないのです。もし、人間の顔に目も鼻も口もなく、丸い顔の人は誰、丸くて色がちょっと白い人は誰……ということになったら、覚えるのに大変苦労するでしょう。それと同じことです。

幼児にとって、ひらがなよりも漢字のほうがやさしいという理由は、要するに記憶の手がかりが多いからです。

実際に試してください。まだ、文字を知らない二、三歳の子どもさんがいたら、鳩でも燕でもいいですから、まず、写真や絵(実物が一番いい)を見せて、これが鳩、これが燕と漢字を見せるのです。しばらくしてから、もう一度、鳩や燕を見せて、「鳩はどっちかな？」と聞いてください。間違はなく覚えています。四、五歳の子どもであれば、言葉をしゃべりますから、漢字を見せれば、漢

字が読めます。

しかし、かなで「はと」とか「つぼめ」と教えたのでは、記憶の手がかりが少ないために、その場では覚えてもすぐ忘れてしまいます。「た」や「な」のように、子どもにとって紛らわしい字は、かりに覚えたとしても翌日には、もう区別がつかなくなっているのです。

ポイント 元来、日本語は漢字を使わなくては意味がはっきりしないのです。それを初めはかなで、それから漢字で教えるため、かえって複雑にしてしまっています。最初から漢字で教えればいいのです。「学校」や「三角」や「宇宙」という言葉は、実社会では漢字以外では存在しないのですから。

●……「鳥」という鳥はいないからむずかしい

ところで、漢字といっても、鳥と鳩を比べたとき、鳩という字はすぐ覚えるのですが、鳥はちょっとこずります。

というのも、鳥という鳥はいないからです。鳩といえは、誰でも頭の中で鮮やかにイメージが描ける具体的な存在です。外で見た鳩と字を結びつけられればいいわけですから、簡単に覚えられるのです。しかし、鳥という鳥は当然見たことありませんから、イメージが思い浮かばないために、むずかしいということになります。

そう考えてみると、最初に学ぶべきものは、ひらがなではなく、しかも鳩とか蟻とか鷲とか鷹とか、具体的にイメージできる漢字がいいのです。

木では柿とか梅。また梅よりは桃とか、とにかく子どもが好きなものだったらまず一回で覚えます。一日たって「これ何という字？」と聞いても、ちゃんと読めます。こんなことはかなでは絶対できません。翌日には必ず読めなくなっています。

その後、今度は抽象された(目で実際に見ることができない)文字、たとえば虫という字とか、鳥という字とか、木という字に移行すればいいのです。

●……言葉と漢字の両面から実体をつかませる

幼児に新しい言葉を教えるときには、実体に即して教えることが望ましいでしょう。というのは、「実体」と「言葉」と「漢字」の三者を結び付けて記憶に刻むところが、言葉の学習では大切なことだからです。

「言葉」は「実体」を思い起こす“聴覚的信号”であり、一方「漢字」は“視覚的信号”に当たります。実在するものに触れるたびに、体験するつど、これを言葉と漢字の両方で表現して示すことが大切なのです。というのも、視覚による記憶のほうが聴覚によるものより強いのですが、それを両方でやれば効果が一層強まるのです。

たとえば「学問、音楽、学校、楽器」と表記すれば、「学問」と「学校」、「音楽」と「楽器」が関連することはすぐにわかります。しかし、これを「がくもん、おんがく、がっこう、がっき」とひらがなで表記するとどうでしょう。音が同じですから、「がくもん」と「おんがく」、「がっこう」と「がっき」を同じ仲間として子どもは関係づけたくなるものなのです。「おんがく」は音の学問とか、「がっき」があるから「がっこう」とか、このような誤解を生じさせてしまう危険性があるのです。

また牛乳のバックには「牛乳」と書かれています。が、「牛乳の『牛』という字はうしとも読むし、『乳』はちちとも読むのよ」などという教え方をするのは避けるべきです。実体に即して、動物の「牛」が出て来たら「うし」と読み、「牛乳」のときは「ぎゅうにゅう」と読んで教えてやればいいのです。それをあわせてたりしてはよくありません。実在から離れた知識を与えると、子どもの頭が混乱し、かえって覚えにくくしてしまうのです。

それよりも子どものほうから、「この『牛』という字は、『牛乳』と同じ字じゃないの？」と気づくまで待つほうがいいでしょう。そうしてから、同じ字でも読み方がいろいろあることを教えてやればいいのです。自分から気づいたことは記憶に深く残るものです。

●……「小学校」はあっても「しゅうがっこう」という表記はない

最初になんで教えることは、いろいろとむずかしい問題を含んでいます。

たとえば小学校一年生では「木」という漢字を学習します。すると、最初にななを教えられていますから、「きしゃがきました」を漢字で書かせると、「木しゃが木ました」になってしまうのです。

「き」といっても、子どもには「木」「汽」「来」「黄」などの区別ができません。子どもは習ったものは早く使いたがります。また、丸呑みで覚えてしまいますから、「き」というかなから漢字を判別することがむずかしいのです。子どもを漢字嫌いにさせる原因はこの辺にもあります。

最初から、「きしゃ」は「汽車」だと教えてしまったほうがいいのです。「きました」のときは「来ました」で、これが「来る」になるときは「く」と発音するんだよと教えてしまうのです。そして「つみき」のときは、「木」をそのまま使うんだよ、ヒマワリの色は「黄色」というふうに覚えさせてしまうと、子どもたちは案外わかるものなのです。自然と区別がつくのです。そうすると、他に「き」という字を書く場合でも、このときはどの字かな？ と頭を働かせるようになります。

「がつこう」でも、ひらがなで覚えさせるメリットは何もありません。この世の中に「がつこう」という表記は存在しないのです。小学校の校門にあるのは「しょうがつこう」ではなく「小学校」なのです。わざわざひらがなで教えるのはムダです。最初から「小学校」でいいのです。漢字だからむずかしいように思ってしまうでしょうが、自分の身の回りに、「小学校」という文字がたくさん存在しているのですから、自然と読めるようになります。こういうものを使って覚えていけば、子どもにでも漢字はすんなり入っていく、というのが私の漢字教育の基本なのです。

ポイント 教育はそもそも基礎がしっかりしていれば間違いないものです。私が幼稚園児で試してみると、年長組より年中組、年中組より年少組のほうが覚えが早かったです。「三つ子の魂百までも」といいますが、三歳児から漢字教育を始めた場合が一番伸びたわけです。

●……幼児は漢字を丸呑みする

なぜ、ひらがなよりも漢字のほうがやさしいかというと、子どもの場合、漢字の形がそのままサツと頭の中に入ってしまうからです。あるがままをパッと受け入れてしまうのです。

われわれ大人は、まず全体を構成するものごと細かに認識した上で、全体をつかみます。と

ところが幼児というのは、いきなり全体を大づかみにしてしまうのです。大人とは逆です。

教育学という学問は科学ではないために、実験というものをまったくしません。子どもにとっては、ひらがなよりも漢字のほうがやさしいということが、いろいろな実験によって証明されているにもかかわらず、幼児は学習能力がない、と頭から決めつけて教育が行われているのです。

明治以来、ずっとこう思い込んでしまっていましたから、多くの幼稚園では遊びが中心です。文字なんてとんでもないという考え方です。したがって、私が幼児に漢字を教えようとしたときは、文部省を始め幼児教育の専門家はこぞって猛反対をしました。

文部省が教科書をつくって、全国一斉に同じことを教育するようになった当時は、全部カタカナでした。一ページ目には「ハナ」というカタカナが二つ並んでいました。花の絵があって「ハナ」、次のページをめくると「ハト」と書いてあって鳩の絵が描かれています。

それから「マメ」。鳩が豆を食べているから、そこにマメと書いてある。その「マ」をそのまま使って「マス」。とにかく覚えにくいのです。

だいたい字というのは、発音です。どうしてこんな形をしているのか、なぜ「ハ」という音になるかは、何の意味もないのです。いろいろな音が世の中にありますが、その中から「ハ」という音を取り出して、「ハ」を表すのはこういう字だと教えられても幼児には結びつきません。

われわれ大人は全部がわからないと、何となく全体が取つきにくいと考えます。一冊の本でも、わからない言葉がいくつかあるような内容のものは、とても無理と放棄してしまうでしょう。

ところが子どもというのは、わからないものがいくつあっても、全体として何となくつかんでしまうのです。ちょうど蛇がタマゴをそのまま吞んでしまうみたいなものです。子どもは丸吞みしてしまふのです。大人はそういうことはまったく不得手です。

幼児の脳は、あるがままを取り入れます。ですから、漢字のようにまとまった図形のような形をしたものは記憶しやすいし、そのまま覚えられます。

●……三歳までに脳の基礎はでき上がってしまう

脳の神経細胞が一番活発に発達していくのは三歳までということは医学的にも証明されていま

す。幼児が言葉を覚えるのも、まさにこの時期なのです。「三つ子の魂百までも」という諺にもあるように、この時期に、言葉だけでなく、人間として基本的な能力が身につきます。この時期の教育ほど大切なものはないことを、まず念頭においていただきたいのです。

日頃、私たちは不用意にテレビをつけていますが、テレビが幼児の脳の発達におよぼす影響は大きいのです。というのは、人間の声というのは左の脳で聞いていますから、テレビから流れてくる機械の声ばかり聞かせて、人間の生の声を聞かせなかったら左の脳は発達しません。

お母さんの声をしっかりと聞かせないうちから、機械から流れる音を聞かせていたら、人間の声も他の音声と同じように右の脳で処理するようになります。

その結果、どうなるかというと、生まれた時からテレビを見て育った子どもというのは、人間の声に対して反応が鈍いのです。お母さんが声をかけても、それにあまり反応しないのです。だいたいテレビの声というのは、反応する必要のないものです。一方的に入ってくるものです。テレビで育った子どもというのは、親と目を合わせない、親が声をかけても大した反応を示さないことが多いのです。

ですから、自閉的な子どもになる危険があるとされています。自分で自分の世界に閉じこもって、親が声をかけても、テレビの音を聞き流すのと同じようになってしまっているのです。

こうなると、お母さんの言葉が吸収されにくくなります。吸収されないから頭脳が発達しません。言葉は音声と意味とが密着したものですから、そういうもので頭の中が満たされないと、本当の意味での「考える」という行為は行われません。

そう考えると、幼児がいる部屋でテレビを長時間つけ放しにするのは避けるべきでしょう。

●……赤ちゃんも一生懸命しゃべっている

生まれて三か月にもならない赤ちゃんでも、お母さんの顔は識別できます。お母さんが声をかけると、それに対して「アー」とか「ウー」と声を出します。それにお母さんが受け答えてやると、また「アーウー」と答えます。お話をしているようなものです。

毎日のように、目と目を合わせてこういうやりとりを繰り返すうちに、人間の音声、すなわち

言葉が発達していきます。

赤ちゃんと話をするときは、ちゃんと相手の目を見て話すことが大切です。赤ちゃんはお母さんの声と同時に目の動きから言葉を覚えて行きます。ですから、赤ちゃんの目を見て話をするということがとても大事なのです。

一歳を過ぎる頃になると、赤ちゃんは、一生懸命に言葉を模倣しようと努力し、カタコトですが、言葉をしゃべり始めます。それから二、三年の間に、母国語の大半をマスターするのです。

驚くべき能力です。「アーウー」の段階から、この素晴らしい才能はすでに芽が出始めているわけです。このスタート地点になるのですから、できるだけ話しかけてやるのが大切です。

名前を呼んで「○○ちゃん、元気ねえ」でもいいのです。赤ちゃんが「アーウー」しか言えないときでもどんどん話しかけてやるべきです。大切なことは、心がこもっているかどうかです。九官鳥が「おはようございます」と言っても、あれは言葉ではありません。単なる“音”です。

赤ちゃんに語りかける言葉としては、「今日はお天気がいいわよ」でも「パパは何時頃帰ってくるかしら」でも「庭の朝顔がとてもきれいよ」でも、何でもいいのです。会話することが大事なのです。

意味がわからない、話を通じるはずもないといって、テレビに子守りをさせたのでは、赤ちゃんの脳は発達しません。それどころか、後々にいろいろな障害が出てくるようになります。

●……ゼロ歳児には不思議な能力がある

私は「一〇か月からの教育」ということを、実は一〇年以上前から保育園で集団的にやっています。これを実施している保育園が全国にいくつかあるのですが、先生たちが決まって驚くのは、どうしてこんな幼児にというより、むしろまだ赤ちゃんに近いような子どもが、漢字に興味を持つのだろうかということなのです。

でも、それは簡単なことなのです。いわば本能的なことです。たとえば赤ちゃんがお母さんのオッパイを吸うのは生きていくために不可欠ですから、初めからその能力が与えられています。実は、オッパイを吸うというのはなかなか困難で、おそらく大人には赤ちゃんほど上手にはできないでしょう。オッパイが張ってひとりに出てくる状態以外では、いくら赤ちゃんのように吸っても出てこな

いのです。

つまり赤ちゃんには生きるために必要な能力は本能的に備わっていることになります。私は漢字に興味を持つというのは頭の栄養だと思っていますから、自然と心ひかれるように子どもはつくられていてと考えています。そう説明せざるを得ないのです。

考えてもみてください、赤ちゃんは何もできません。手足をバタバタさせるだけで、自分の体さえも満足に動かせないのに、オッパイを吸うというむずかしい行動はこなしているわけです。そして三、四歳になると言葉を覚えます。一歳過ぎた頃にはまだ「ウンマ」「マンマ」ぐらいしか言えなかった子どもが、この時期には日常的な会話はわかるようになります。ほとんどの日本語を理解して、自分が生きていくために必要な言葉がしゃべれるようになるわけです。

幼児の言葉を聴く能力やしやべる能力には、目を見張るものがあります。大人になってからフランス語やドイツ語ができるかという、三年ぐらいで日常会話をマスターすることはかなり至難の技でしょう。つまり必要不可欠な能力というのは、初めから用意されているのです。ただし使わないと発達しません。使わないでいると絶ち切れなくなってしまいます。

人間は生まれたときからこの能力を備えているわけですから、まだ一歳にもならない、わずか一〇か月の子どもでも早すぎることはないのです。「耳」でも「目」でも、口に出しては言えませんが、漢字を見せてやれば覚えるのです。つまり言葉がしゃべれないうちからでも、識別することができるのです。ゼロ歳児が持つ能力には、一種天才的なものがあります。

ポイント 小学生に算数の試験をしてみると、計算問題はだいたいできます。でも頭のいい子どもでも、文章題が解けないのです。要するに文章を読んで式が立てられないのです。それは問題がかなで書かれているから意味がくみ取れないのです。

●……チンパンジーと人間の子どものどこで差が出たか

元来、文字というものは、言葉を記憶するためにつくられたものです。

「初めに言葉ありき」と聖書にも書かれているように、おそらく人類はこの世に誕生すると、す

ぐに言葉というものを使うようになったでしょう。人間に次いで知能の高い動物はチンパンジーであるといわれています。

このチンパンジーに言葉を教育した学者がアメリカにはたくさんいます。一九三〇年代、アメリカの学者たちはチンパンジーに言葉を教えるため、涙ぐましい努力を払ってきました。

チンパンジーを自分の子どもと一緒に育てたのです。同じ洋服を着せて、同じ食べ物を食べさせて、同じようにあやして育てたのです。双子の兄弟として育てたようなものです。

ところが、どんなに苦勞してもチンパンジーの脳は人間の子どものように成長しません。チンパンジーに言葉を覚える能力がないのが原因です。面白いことに、人間の子どもが言葉を覚えるまでは、チンパンジーの知能は人間の幼児とほぼ同等です。むしろ同等以上と言ってもいいくらい知能が高いのです。にもかかわらず言葉が覚えられないのです。

人間の赤ちゃんは、二歳くらいになると盛んに言葉を覚えて、三歳から四歳になるとほぼ完全に母国語をマスターして、親の言うことが理解できるようになります。そして、自分の意志を表現することもできるようになります。

こうなってくると、人間とチンパンジーとの知能差というものは歴然としてくるわけです。

知能の源泉が言葉にあるということは、この試みでもわかります。進歩の原動力は言葉なのです。言葉が豊富になり、知識が豊かになるから、人間は素晴らしい生活ができるようになったのです。ところがチンパンジーは、せつかく自分で得た知識や知恵を、言葉を媒介として子孫に伝えることができません。

単純に生物として生きる本能はともかく、いくら世代を重ねてもそれ以上の進歩はあり得ないのです。いつまでも同じような生活をただ繰り返すだけです。一〇〇万年前のチンパンジーと現代のチンパンジーと、生活上に何か変化があったかというと、目を見張るような進化はありません。それというのも、チンパンジーには言葉がなかったからです。

人類はこの一〇〇万年の間に大変な進歩を遂げました。しかし、調べてみると一〇〇万年の歴史の中で、九九万年の間はあまり進歩はなかったようです。チンパンジーと比べてもさほど変わり映えのない生活を送っていました。

それは人類が食べ物を得ることだけで終わってしまったからです。食べ物を得ることは自分

の命を保つということ、家族を養うということで、実に大変なことでした。木の実を拾ったり、小さな生き物を捕らえて食べていたわけですが、保存がききません。食糧がたくさん確保できたとしても、夏の真っ盛りに一日経過したものを食べたら、中毒を起こして死んでしまいます。

ですから、毎日毎日食べ物を追い求めて、それで一日が終わってしまっていたのです。一万年前までの人間の生活は動物と大して違いがなかったわけです。

●……一五年間、小学校の現場で漢字教育を実践してみた

言葉を覚えるのが幼児期であっても、漢字を教えるのは小学校に上がってからではないかと考えている人も多いと思います。

前述したように、私の二歳の息子が「教育」という漢字を読んだことがきっかけとなって、私は、幼児にとっては、かなよりも漢字のほうがやさしいのではないかと考えるようになりました。しかし、これは理論で証明できるものではありません。

そこで、昭和二八年から四二年までの一五年間、小学校の現場で漢字教育を実践してみました。

その当時は、一年生がもつとも学習能力が低く、学年が進むにつれてその能力が高まるのだから、教える漢字も学年が進むごとに増やしていくほうがいいと信じ込んでいました。現在でも、すべての教師にそうした先入観があります。

ところが、実際に漢字を教えてみると、一年生が一番よく覚えるのです。逆に学年が進むにつれ、漢字を覚える力が衰えていったのです。総合能力では一番低いはずの一年生が、漢字を覚える能力では一番優れていたのです。実際に目の前の子どもがどんどん漢字を覚えていく様子を見るのは驚きでした。

当時、一年生の目標は三〇〇字ほどでした。私はこれを三〇〇〇字くらいに増やしてみようと考えていました。ところが、子どもたちはいくらでも吸収します。五〇〇〇字になり、とうとう七〇〇〇字にまでなりました。わずか一年間で、小学校六年間で覚える漢字の八割方を覚えてしまったのです。

そこで、ひよとしたら就学前の幼児には、もっと漢字を覚える能力があるのかもしれないと思いついたのです。

すべてものごとには最適の時期があります。その時期に行えば容易にできるのに、はずしてしまうと急に困難になります。これを「臨界期」と呼びますが、「言葉の臨界期」は幼児期です。ですから、どんな子どもでも三歳ぐらいで母国語を身につけ、幼稚園では先生の話を理解し、また自分の考えを他人に伝えることもできるのです。

ところが、たとえば一九二〇年に発見された狼に育てられた少女カマラの場合などは、言語の学習は困難を極めました。救出した牧師夫妻の熱心な指導にもかかわらず、その後生きた九年間に四五語しか覚えられなかったと報告されています。臨界期前の幼児が三年間で二〇〇〇語もの言葉が覚えられないということと比べると大変な差です。臨界期を過ぎてから始めた学習がいかにおぼろしいかわかりただけだと思います。

これは言語学者のすべてが認めるところですが、言葉を覚えるのと同時に漢字を学べば、言葉と同じように吸収されていくものではないかと考えたのです。

昭和四三年から三年間かけて、今度は、就学前の幼児に漢字教育を始めてみました。最初に始めたのは大阪の小路幼稚園というところです。

園長の井上先生という方が「先生、小学校で一生懸命やっているけれども、これは幼稚園のほうが向いているかもしれませんね」とおっしゃったことがきっかけになりました。

実際にやってみて驚いたことは、幼児の漢字学習能力というのは凄いものだということです。漢字教育をしないときに一〇〇だった園児の知能指数が、漢字学習を始めてからは一一〇になり、一二〇になり、ついには一三〇という知能指数になったのです。

幼児期の漢字教育は、明らかに知能を高める働きがありました。これはたくさん漢字を覚えたということよりも、漢字を知ったことで加速度的に知能が高められたという点が大切です。

ポイント 「テストすればちゃんと書ける漢字を、作文に使わないのです」。かつて私が小学校の指導主事をしていた頃に、先生が困って言ったことです。これもおこなから教える弊害です。漢字を習った子どもはやたらと漢字を使いますが、間違った使い方も多いものです。それを先生がいちいち直すわけですから、子どもは前へ進めなくなってしまうのです。使いたくても使えなくなるのです。

……先進国の中で国語の授業が最も少ないのは日本

ドイツの小学校では、理科の学習時間が日本の半分しかありません。これはにわかには信じられないでしょう。ドイツでは、日本の子どもに比べると母国語の学習負担が非常に少ないために、国語の時間は少なく、理科の学習が多いのではないかと思っていました。

ところが、ドイツでは何と日本の半分しか理科の学習時間がありません。一方、国語の学習には、日本の二倍以上の時間を費やしているのです。ドイツの一週間の授業時間が二四時間あるとすると、月曜日は国語が三時間もありません。算数が一時間。これで一日の授業が終わります。

火曜日は国語の時間は二時間、算数が一時間、音楽が一時間。水曜日は国語が二時間あって、算数が一時間、体育が一時間。木曜日は月曜日と同じで、金曜日は水曜日と同じです。土曜日は国語を二時間、算数と図工を一時間ずつです。

つまり、国語の授業を毎日二時間から三時間もやっているということになります。ドイツの小学校では、低学年の三年間は国語を重視した授業になっています。算数の授業は毎日一時間ありま

すから、残った時間はたったの四時間しかありません。そして四年生になって初めて理科の授業が始まるのです。これがドイツの小学校教育の実態です。

いかに国語の授業を重視しているかがおわかりでしょう。理科も社会科も算数も、国語力をしつかりと身につけなければ、教育効果が低いと考えているのです。

たしかに国語力の低い子どもが理科を勉強しても吸収するものが少ないのです。教科書の内容が理解できないことが原因です。

日本では全教科の四分の一の時間が国語の授業ですが、ドイツでは二分の一です。つまり国語をしつかりと学ぶことが、将来、算数や理科を学ぶときに、大いに役立つと考えているのです。言葉が曖昧なままではきちんとした学習はできないということがよくわかっているのです。

……算数嫌い、理科嫌いの原因は国語力不足

ドイツでは、小学校低学年の授業の大半を国語の授業に当てていますが、日本ではあまり国語

教育に重点を置きません。

しかし、小学校の教員が国語力の重要性を認識して、算数の時間も理科や社会科の時間も、みんな国語の時間だと思って国語教育に力を入れる必要があります。

算数で「三角」という言葉が出てきます。小学校では、この三角という言葉で「さんかく」とかなで教えています。

どうして「三角」という漢字を使わないのでしょうか。角という字を使えば、「角が三つあるから三角だな」と言葉の意味がすぐ理解できるのです。

黒板に三角形の図を書いて、これが「さんかくけい」だと教えても子どもには呑み込みにくいので、「三角形」なら一目瞭然です。

「宇宙」もそうです。以前は小学校で習う漢字の中に入れていませんでしたから、小学校六年生になっても「うちゅう」とひらがなで習っていました。でも、「うちゅう」という言葉を使うときは「宇宙」に決まっているのですから、最初から漢字で教えたほうがいいのです。

漢字で学習すれば、算数や理科でもよくわかるのです。算数嫌い、理科嫌いができるのも、国語力不足が原因です。計算問題はよくできても、文章題が苦手という子どもの場合、問題の意味がわからないというケースが大半です。こういう意味だと説明してやれば簡単に解けるのです。どんな学問でも、言葉を疎かにしたら理解することはできません。

言葉をしっかりと理解するためには、どうしても漢字というものをしっかりとやらなくてはいけないのです。

●……幼児期の漢字教育で受験戦争から解放される

高校や大学受験のために多くの子どもが予備校に通っているのが現実ですが、親も子どもも本当は予備校などには行きたくないし、行かせたくもないのです。数学オリンピックに出場した子どもを育てた母親にインタビューした『数学の天才児ができた！』という本によると、どの母親も予備校や塾には子どもを通わせてはいません。しかも、子どもに教育をしたのは、小学校に上がるまで、それ以後は親は何もしていません。にもかかわらず、オリンピックに出場した子どもたち

は東京大学とか京都大学に合格しています。私には二人の子どもがいます。慶応義塾大学と早稲田大学に入りましたが、やはり予備校には通っていません。むしろ、私が家庭で勉強をみてやったということもありません。それどころか、就学前に漢字を教えたただけで、それ以後は何もしていないのです。百科事典を買ってやった程度のことです。幼児期にしっかりした教育さえしておけば、親も子どもも受験戦争から解放されるのです。こんな楽なことはありません。

●……英会話を完璧にマスターさせたいなら幼児期から始める

中国語ほどではありませんが、英語の発音の種類は相当多いのです。一〇〇の単位で数えるほどあります。たとえば、私たちが「ア」と発音する、これに所属する音の種類だけでも五つあります。だから発音記号も五つの別があります。

しかし、日本人にはそれは聞き分けられません。発音するときも、それを区別して発音するのは非常にむずかしいことです。

世界で日本人ほど外国語を話すのがヘタな民族はいないでしょう。しかしその理由を考えた人がいますか？ その理由を考えて解決しなければ、相変わらず外国語はダメなままです。

日本人が外国語を完璧にマスターする方法は一つしかありません。幼児期に外国語を学習させればいいのです。それ以外に解決方法はありません。英語は幼稚園で学習させるべきです。

中国では、日本人より流暢な外国語を話す人が大勢います。中国語は、言葉の音韻が多いことがその理由です。日本語は語彙は多くても、発音の単位が世界で一番少ないため、音韻の区別を聞き分けられないのです。

したがって、英語教育は小学校から始めてもむずかしいのです。小学校でやっても、もう耳は対応できなくなっています。聞き分ける能力は、とうに失われています。幼児期、少なくとも小学校に入る前にやらなくてはダメです。

もつとも、日本人教師に頼んでは意味がありません。むしろやらないほうがいくらいです。日本人が正しい発音ができないのは、どうしようもない宿命のようなものです。日本語にある音韻を使っただけでしか発音できないので、英語の音を使いわけるのはほとんど不可能でしょう。多少お金がか

かつて、イギリス人とかアメリカ人に教えてもらうべきだと思います。要するに、幼児期に聴く耳をつくればいいのです。聴力をつけておいて、後になって英語を聴いたときに、どんどん吸収できる耳にしておけばいいのです。この耳を育てるのは、幼児期しかありません。幼児期に英語を学べということには、そのような理由があるのです。